

南紀方言における「ノダ」相当形式と「タ」の共起

大野 仁美

キーワード：タ、ダ、ノダ、否定

要旨

南紀方言における「ノダ」相当形式である「ンヤ」は、「タ」と共起して「～ンヤッタ（～ノダッタ）・～タンヤ（～タノダ）・～タンヤッタ（～タノダッタ）」という組み合わせを形成することができる。これらが名詞+ダに後続して形成する文と、それらに対応する否定文を考察することによって、「ムードのタ」と呼ばれるもののうち、「思い出し」の「タ」が顕著に異なることを指摘する。

1. 名詞+ダとムードのタ

現代日本語における「タ形」は、それが付加される命題であらわされる動作や状態が実現される時間に関わる場合と、そうでない場合がある。後者は「ムードのタ」と称されている（ただしその多くは「過去」という意味設定で説明できるという強い主張も存在する：cf. 井上 2001, 定延 2004, 2010, 2014）。本稿では、南紀方言において、名詞（命題）+「ヤ（ダ）」および「ンヤ（ノダ）」を用いた文に「タ形」が用いられた場合どのような意味を表すのか、またそれらの否定文を考えた場合否定可能なのはどの部分かを考察する。

現代日本語の「ダ」に相当する南紀方言の「ヤ」は、例文(1)・(2)のように名詞に後続して文を形成する。これらはある人物が現在あるいは過去において「日本人である／であった」ことをあらわす。

- (1) 日本人ヤ。 「日本人だ」
- (2) 日本人ヤッタ。 「日本人だった」

例文(2)において、「(誰かが) 日本人」であった時点は、当該の人物が過去に存在したが今は存在していない場合においては、過去である。その人物が発話時点においても生存している場合は、その人物が「日本人である」状態は過去の出生の時点から発話時点までずっと継続しているので、過去ではない。しかし、当該の人物が日本人として生存しているにも関わらず、「日本人ヤッタ」という発話がなされることもある。以下のような状況を考えてみよう。

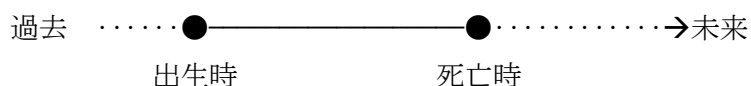
状況 A：（今は国籍を変えて日本人ではないが、その前は）日本人ヤッタ。

状況 B：（昨日会った人は）日本人ヤッタ。

- 状況 C：（ある歴史上の人物の国籍を調べてみて初めて知ったのだが）日本人ヤツタ。
 状況 D：（ある人物の国籍を調べてみたら、〇〇人だと思っていたのだがそうではなく）日本人ヤツタ。
 状況 E：（ある人物の国籍を知らなかったが、調べてみてわかったことに）日本人ヤツタ。
 状況 F：（すっかり忘れていたけれどある人は）日本人ヤツタ。

状況 A は、発話時点とは異なる過去の状態をあらわしており、状況 B は「ある人と会う」という出来事が過去において実現されたことをしめしている。状況 C は当該の人物は既に死亡している。これら状況 A～C においては「タ」は時の位置づけに使用されていると言える。一方で、状況 D～F は当該の人物が存命中でもすでに死亡していても用いることができる。それまで国籍を知らなかった場合でも（状況 E）、それまでの勘違いを訂正する場合でも（状況 D）用いられる。これらはいずれにしてもある知識の獲得に到達したということを示すのであって、当該の人物が「過去において」日本人であったことを意味するわけではない。同様に、状況 F は、話者の認識が一度とぎれたものを再び呼び起こしたことを述べている。いずれも、当該の人物自身の生死や国籍の変更とは関係がない。

これらのイベントを時間軸上であらわすと以下ようになる。ある人物 X が「日本人である」という状態が実現されているのは、その人物が出生して死亡するまでの間、以下の実線で示される期間である。



話者が X を「日本人である」と認識する時点を $t1$ 、 $t1$ から一定の時間の後に話者が再度 X を「日本人である」と認識する時点を $t2$ とする。これらの時間軸上での生起の仕方は、以下の3通りである。

1. 出生時→ $t1$ → $t2$ →死亡時
2. 出生時→ $t1$ →死亡時→ $t2$
3. 出生時→死亡時→ $t1$ → $t2$

発話時点を $t2$ の直後とすると（1 の場合はなおかつ「死亡時」の前とする）、人物 X が「日本人である」という状態を過去の出来事としてとらえられるのは、2 と 3 のケースである。しかし実際には、1 のケースでも状況 F のような「思い出し」を表すのに「タ」形はもちいられるし、2・3 のケースでも「タ」形を用いずに述べることは可能でありよくなされる（例文 3・4）。

- (3) （人物 X が死亡後初めて国籍を知って）「(X は) 日本人ヤ」
- (4) （歴史上の人物 X の評伝をみて国籍を知って）「(X は) 日本人ヤ」

これらの場合の「タ形」（ここでは「ヤッタ」）や「ル形」（ここでは「ヤ」）は、時間軸上で人物 X が「日本人である」状態が実現されている位置を表しているのではなく、人物 X が「日本人である」ことの認識の話者による形成あるいは判断の時点を表している。また、人物 X の国籍をあれかこれかと考えた後に「日本人である」という認識に到達した場合も、X が存命中であっても、また新たにその認識を得たのであっても、「(X は) 日本人ヤッタ」と表出できる。

2. 否定：命題の内部と外部

南紀方言では、「ヤ」を用いた文の否定文は、「ヤ」にかえて「～トチガウ（・～チガウ・～チャウ）」を用いることで得られる。それぞれの否定文を以下に示す。

- (1) 日本人ヤ。 「日本人だ」
- (1') 日本人トチガウ。 「日本人じゃない」
- (2) 日本人ヤッタ。 「日本人だった」
- (2') 日本人トチゴータ。 「日本人じゃなかった」

状況 A'：（国籍を変えている。今日本人ではないが、その前も）日本人トチゴータ。

状況 B'：（昨日会った人は）日本人トチゴータ。

状況 C'：（ある歴史上の人物の国籍を調べてみたら）日本人トチゴータ。

状況 D'：（日本人と思っていたある人物の国籍を調べてみたら）日本人トチゴータ。

状況 E'：（ある人物の国籍を知らなかったが、調べてみてわかった）日本人トチゴータ。

状況 F'：（すっかり忘れていたけれどある人物は）日本人トチゴータ／日本人トチガウンヤッタ。

文末に「チガウ・チゴータ」を用いたこれらの否定文は、すべて「日本人ではない」という認識に至ったということを示す。そのうち状況 F'のみ、異なるタイプの否定文も用いることができる。状況 A'～E'ではこの例文(5)を用いることはできないが、状況 F'ではむしろこちらのほうが自然である。

- (5) 日本人トチガウンヤッタ。 「日本人じゃないんだった」

例文(5)は、話者が以前「人物 X は日本人ではない」という認識を持つに至っていて、それを失念していたが、再度思い出したという意味である。「日本人トチゴータ」は、「日本人ではない」ことを新たに認識するという意味なので、状況 F'には例文(5)のほうがより適切である。これは状況 F'が状況 A'～E'と異なっていること、つまり元の（否定ではない）状況 A～F においても、状況 F だけが異なった意味・論理構造を持つことを示唆する。それは、状況 A～F において、A～E は「日本人である」状態が過去の時点において実現されていたか、「日本人である」という話者による認識に到達したことを表しているが、状況 F は既に成立して保存されている認識があってそれを再確認したという異なる意味内容をもっていること、そしてそれらが文レベルでは同じ形式で表されているということである。

次に、「ノダ」・「ダ」・「タ」が共起する場合をさらに見てゆこう。例文(5)の「ノダ」相当形式である「ンヤ」の「ン」によって名詞化された命題部分を□で囲むと、以下のようになる。

(5) □日本人トチガウンヤ+タ

これと同じ構造「命題+ノダ+タ」をもち、肯定命題であるものは、例文(2)ではなく、以下の例文(6)である(命題中の「ダ」は「ンヤ」に後続される際に「ナ」に交替するとする)。

(6) 日本人ナンヤッタ。 「日本人なんだった」

(6)' □日本人ヤンヤ+タ

例文(6)は、発話時点以前に(ある人物が)「日本人である」という認識を得ていたが、それを失念していて、改めてそれを再認識した場合に用いる。同様の意味を表す例文(2)「日本人ヤッタ」との違いは、例文(6)が「ノダ」相当形式である「ンヤ」を含むことにより、なにか他の命題・情報が付随することを強く示唆しているという点である(cf. 大野 2015)。同じ「思い出し」を表すとしても、「日本人ヤッタ」は、「(忘れていたが)日本人だ」ということを意味するのみだが、例文(6)は、「日本人である」ということに付随して、たとえば「この人物はナイフとフォークではなく箸を用いて食事をする」ということを了解していたのに、食卓に箸を用意するのを忘れたときなどに、表出される。

逆に、例文(6)側から対応する否定文を考えた場合、それは例文(5)なのであるが、例文(5)は(「ノダ」を含まないので)例文(6)のようには関連する命題・情報の存在を示唆しない。また例文(6)は、対応する否定文として例文(6)''を考えることもできるが、これは例文(7)のように疑問文として用いられるのでなければ意味解釈が困難な文である。つまり、これらにおいては、命題の内容を肯定から否定にかえることはできるが、「思い出し」部分を担う「ヤッタ」を否定にはできないということである(否定疑問にならできる)。

(6)'' ? 日本人ナントチゴータ。 「日本人なんじゃなかった」

(7) 日本人ナントチゴータ(ン)? 「日本人なんじゃなかった(の)?」

次の例文(8)は、「日本人ヤ」に「タ形」と「ノダ相当形式」が共起しているが、ここでは「タ形」は命題の中に入っている((8)''の下線部)。

(8) 日本人ヤッタ^ンヤ。 「日本人だったんだ」

(8)'' □日本人ヤ+タ^ンヤ

これは、当該の人物が「日本人である」という認識に到達したのに加え、それに付随する命題・情報が存在することを示している。たとえば、この認識によって、今まで説明できていなかったことが腑に落ちた(たとえば、日本のことをよく知っている留学生だと思っていたら、実際に日本人だった)などである。この場合、命題内に「タ形」のない「日本人ナンヤ」と比べると、この発話以前にこのように「日本人なのか、どうなのかを確定する決定的要素のない状態」があったことが必須である。たとえば、海外から来た留学生が日本人としての文化背景や出自をもっていることを知ったとき、それを「日本人ナンヤ」

とも「日本人ヤッタンヤ」とも表出できる。両者の違いは、前者が新規にその認識に到達したことを述べているのに対し、後者はその認識に至るまでに何かしら考えていたことを示す。

例文(8)に対応する形式的な否定文は、以下の2つである。例文(8)''は、「日本人ヤッタ」の「タ」が命題の実現を過去に位置づける意味だと解釈すれば適格である。先の例文(6)''と同様に、例文(9)のように疑問文で用いることも可能である。例文(8)'''は、「日本人ではない」という認識に到達したことを示すが、ある人物が日本人でない（なかった）という状態の実現は、発話時点以前の過去である可能性も、そうでない可能性もある。後者の場合は、発話時点以前における誤った認識の修正が行われたことを示す。どちらの場合でも、「ノダ相当形式」が後続しているので、付随する他の命題・情報が存在することを示唆する。

(8)'' 日本人ヤッタントチガウ。「日本人だったんじゃない」

(9) 日本人ヤッタントチガウ(ン)? 「日本人だったんじゃない(の)?」

(8)''' 日本人トチゴタンヤ。 「日本人じゃなかったんだ」

最後に、「命題+タンヤ+タ」について触れておく。例文(10)は、例文(8)の末尾にさらに「タ」が付加されたものである。過去においてある人物が「日本人だった」と再認識したことをさらに忘れていて、その再認識したことから再び思い出しているという意味を表す。たとえば、過去に、食卓に箸を出さずにいて、食事相手が日本人なのを忘れていた、箸が必要だった、と思い出す経験をしたそののちに、その経験をまた忘れて、以前も忘れたということから再び思い出す、という二段構えになっている。対応する否定文は、命題を否定にかえる場合と、ノダ相当部分における否定と2種考えられる。そのうちノダ相当部分の否定である例文(10)'は、例文(11)のような疑問文でないと意味の解釈が困難である。

(10) 日本人ヤッタンヤッタ。 「日本人だったんだった」

(10)' ? 日本人ヤッタンチゴウタ。 「日本人だったんじゃないなかった」

(11) 日本人ヤッタンチゴウタ(ン)? 「日本人だったんじゃないなかった(の)?」

(10)'' 日本人トチゴタンヤッタ。 「日本人じゃなかったんだった」

命題に否定を含む例文(10)''は、ある人物が「日本人ではないこと」を忘れて、それを思い出すという経験をしたそののちに、またそれを忘れてもう一度前回忘れたことから思い出す、という例文(10)と同じ二段構えの意味に解釈できる。

3. むすび

本稿で見てきた例文に対応する否定文の作成の可否を見てわかることは、「名詞（命題）+ダ」の文において用いられる、「思い出し」を発話時点において実現する「タ」の否定が不可ということである（過去に思い出した内容をしめす命題部分は否定の内容にかえることができる）。この「思い出し」の特徴が名詞述語文以外ではどのように観察できるのかは

次の課題とする。

参考文献

- 井上優 (2001)「現代日本語の「タ」」 つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』 pp. 97-163. ひつじ書房.
- 大野仁美 (2015)「南紀方言における「ノダ」相当形式と終助詞」『言語と文明』13, pp. 123-134. 麗澤大学大学院.
- 定延利之 (2004)「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究』21, pp. 1-68. 神戸大学国際文化学部.
- 定延利之 (2010)「「た」発話をおこなう権利」『日本語／日本語研究』1, pp. 5-30. 日本語／日本語教育研究会.
- 定延利之 (2014)「「発見」と「ミラティブ」の間」定延利之編著『日本語学と通言語学的研究との対話』 pp. 3-38. くろしお出版.

付記

本稿は、科研費(挑戦的萌芽研究 25580092)および平成27年度麗澤大学特別研究助成(現地調査分)をうけて実施した研究の成果の一部である。調査にご協力下さった南紀のみなさまに感謝申し上げます。